JAUW　調査・研究委員会報告

ユースの声からみえた課題～世代をこえて希望の対話を

ユース×シニア　交流カフェ

2026 年　3 月

一般社団法人　大学女性協会

ユースの声から見えた課題～世代をこえて希望の対話を

ユース×シニア　交流カフェ

目　　次

はじめに ……1

ユース×シニア交流カフェ　実施報告

Ⅰ茨城支部 ……3

Ⅱ静岡支部 ……8

Ⅲ京都支部 ……11

Ⅳ奈良支部 ……12

Ⅴ岡山支部 ……14

調査・研究委員の感想 ……18

交流カフェを終えて ……21

はじめに

調査・研究委員会　委員長　片岡雅子

調査・研究委員会では、3 年にわたり、「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る」というテーマで調査研究を続け、2025 年 3 月に報告書を発行し、以下の提言を行いました。

1. 教育機関内における相談システムの在り方を見直し、ユースが気軽に相談できる体制を作る
2. 授業料無償化の政策や奨学金制度における給付制への移行を加速し、経済的背景に関係なく、誰もが教育を受けることができる仕組みづくりを進める
3. 自立した個人を形成する市民教育、特に考えや意見を政策の場につなげる姿勢を培う主権者教育の徹底を図る
4. ユースが社会へ繋がっていくことのできるきっかけ作りとして、世代を超えた対話の機会や場の設定を多くし、「ケアしあう社会づくり」を進める

報告書発行後、ユースとの対話をさらに進め、より多くのユースが社会と繋がることができる手立てを創ることが重要であるという声を多く聞くようになりました。そのために世代を超えた対話の機会を増やしていくことが急務であると考え、2025 年度の取り組みとしました。

【目的】

2025 年 3 月発行の報告書の提言 4 「ユースが社会とつながるきっかけ作りとして、世代を超えた対話の場を増やす」を実践する活動として、ユースとの関わりを継続するため、「ユース×シニア交流カフェ」は、より多くのユースが社会と繋がることができる一助として、世代を超えた対話の機会を増やし、ケアしあう社会づくりをさらに進めることを目的として実施しました。

・ユースの生きやすさを共に考える
・大人世代として何ができるかを探る
・世代を超えた対話を通じて「ケアしあう社会づくり」を進める

【経緯】

・2023 年 5 月～9 月　「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」をテーマとして、学生対象にコロナ禍での生活や思いについてのアンケート、個別インタビューを実施
・2025 年 3 月　アンケート、個別インタビューの報告書発行
・2025 年 6 月～10 月　交流カフェ実施のための交渉・準備
・2025 年 11 月～12 月　ユース×シニア交流カフェ実施
・2026 年 4 月　ユース×シニア交流カフェの報告書をオンライン上で報告

【実施方法】

全国の支部に参画の呼びかけを行いました。

1．概要

〔実施形態〕　支部ごとに数人グループ、対面での対話を行う
〔時間〕　2 時間程度
〔実施時期〕　2025 年 11 月～12 月

〔場所・日時〕地域ごとに調整
〔募集期間〕　2025 年 9 月末を目処に地域ごとに設定

2. 募集方法
チラシを作成し、インタビューに応じてくれたユース、大学関係者等に直接またはメールで参加を呼びかけ。

3. 実施テーマ
基本的に「報告書の提言」について、あるいは、ユースからの希望があれば、自由テーマで対話。

4. 報告方法
すべての交流カフェが終了した時点で、集約して、大学女性協会のホームページに掲載。

5. 実施 5 支部
京都支部（11/15）ユース 1 名　奈良支部（11/21）ユース 3 名　静岡支部（11/22）ユース 5 名
岡山支部（11/24）ユース 3 名　茨城支部（12/27）ユース 2 名

支部によってユースとのつながり方やテーマは異なりましたが、社会課題への関心、主権者教育、就職や生活の不安、世代間ギャップ、シニア世代への期待など、多様なテーマが語られました。どの地域でも「対話の場をつくることの難しさ」と「対話が生まれたときの手応え」が共通して語られました。

Ⅰ　茨城支部

１．開催概要

参 加 者：８名
ユ ー ス：２名　A さん、B さん
支部会員：６名　飯田久子　中島美那子　加藤光子　安藤隆子　松本由美子　城倉純子
開催日時：2025 年 12 月 27 日 （土） 14 時 ～ 16 時
開催場所：地域の交流拠点のレストラン

２．意見交換の内容

（１）なぜ交流会に参加しようと思ったのでしょうか？思いをお聞かせください。

B：普段思っていることを発言しにくいタイプなので、あえて知らない方々に話してみようと思った。

A：世代間交流に関心があった。自分の人生にはいろいろあったので、大学の指導教員から勧められて参加してみようと思った。

（２）生活状況など

S：（支部会員の発言を表す。以下同様）生活状況について教えてください。

A：4 歳（年長組）と 7 歳（小 1）の二人の妹がいる。両親は自分が 3 歳ごろの時に離婚、母と兄の 3 人で暮らしてきたが、母が看護師の仕事での過労から病気になり、仕事をやめ半分は寝ている毎日に。兄と二人で掃除洗濯などの家事を担ってきた。ご飯は母が作ってくれた。母は、勉強しろとは言わなかったが、教えてくれたりした。当時はヤングケアラーという言葉はまだなかったけれど、それだったかと思う。中学 2 年の頃に母は病状が良くなって再婚し、高齢出産で妹たち二人を産んだ。今は保護者が 4 人（親、兄、自分）いるので、二人の妹たちは姫みたいだ。

2 つ違いの兄は人間嫌いなので、ずっと不機嫌だった。バイトもしないし、高校も保健室登校だった。自分は家も外も好き。社会が悪いとか、社会に対する恨みのようなものはない。高校に入ってからはネット上でのコミュニティを作って、交流している。親にああしろこうしろと言われず、自分でやらなければならないと思ってやってきたので、言われてやるよりも良かったと思う。

週 1、2 回、夜 7 時頃までバイトをやって、家事をやって、自分の時間は夜の 9 時以降から。兄と勉強時間を交代で確保した。小さい頃から（ケアをしてきたことを）誇りに思ってきたので、大学に入って皆が遊んでいるのを見て、他の若い人たちを見て、それくらい（自分の生活の事など）自分でやれよと思った。しかしこの環境が辛いというのはなかったが、時間がなかった。小学校では空手、中学に入ってからはバスケなどいろいろやらせてもらった。バイトに行く前と帰ってからは家のことをちゃんとやろうね、と言われてきた。周りの皆は、バイト面倒、バイトだるいと言っているが、自分はバイトに行かせてもらっているという感覚だ。

B：家では家事を手伝ってはいないが、自分の分の洗濯はやっている。結婚したら仕事を続けるかどうかは分からない。家で自分一人でいるのが好き。料理などは母（専業主婦）がやってくれている。大学を出たら一人暮らしをするようにと親から言われている。

S：一人暮らしは、自立できるからいいと思う。

A：大学を出たら一人暮らししたいなら OK と言われている。お金がかかるので、今はできるだけ実家にいさせてもらった方がいいと思っている。仲のいい家族なので、家族は嫌いじゃないので（一

人暮らしをするのは）少し寂しい。
S：選挙には行っていますか？
A&B：選挙には 18 歳の時からずっと家族ぐるみで行っている。高校の時に選挙に行くようにと授業で学んだ。大学でも期日前投票についての説明があった。家族の皆やいろんな人と話したり、気になる候補者がいるとネットで調べたりする。祖母の家に行くと新聞を取っているので、それを見たりして調べる。
S：社会に対する関心は？
A：特にはないけれど、その時に問題になっている事についてどうなっているのかなと調べたりする。

（3）大学生活は今どんな状況ですか？
S：AI の時代について、どう思いますか？
A：皆 AI を使いこなしているが、使いすぎだと思う。レポートなどの作成時間の短縮のためならいいと思うが、AI から考えをもらうのはどうかと思う。卒論も AI を利用して作成する人は多い。
A：ゼミに入って、大変なゼミだと思った。ボランティアなど地域に赴く活動が多い。安心できる場所があるって大事だ。自分の所属するゼミがそうだ。
B：所属の学部にはゼミはないが、3、4 年生になるとほぼゼミのような 6～7 人くらいのグループに分かれフィールドワーク他をする授業がある。
B：バイトをしてほしいと親からいわれているが、不安でまだやっていないままここ迄来てしまった。
A：不安ならば、短期のバイトとか、知り合いのところで手伝うとか。まずボランティアから始めてみるのがいいと思う。やり遂げるとかじゃなくても。好きなものから探していく。なりたい職業を決めておくと、それにつながるボランティアが探せるかも。
S：（会員たちの昔のバイトの体験談ご披露合戦に）バイト先の賄い食がすごく質素とか、乳児院の抱っこボランティアとか。面白がってやる、というのでも良い。

（4）将来のことについて
S：A さんは、そろそろ就活の時期に。
A：保育士を目指しているが、先輩を見ていても保育については学べば学ぶほどいやになる人が多いみたいで。卒後は保育の資格を活かして、児童養護施設などで仕事をしてもよいかと思っている。
S：施設での虐待が問題として取り上げられ報道されたりしている状況なので、そのような施設に就職し活躍してほしいですね。
S：特に里親支援は重要です。里親ドリフトといって、里親と里子のマッチングがうまくいかないと施設に子どもが戻ったり、また新しい里親へ行ったりと、子どもは二重に三重に傷つくことになる。
S：仕事を選ぶときは、お金で選ぶとかがありますか？
A：自分の行きやすくて高いところ、というのがある。
A：今の学生は民間志向が多いと思う。公務員を希望する人はあまりいない。育休が取れる（取らされる）が、育休とったらそのあと出にくいというのがあると思う。誰かしらは迷惑だと思っているといったような感覚はある。
S：男性が取る必要がある。当たり前になるといい。本人は「休んでしまって申し訳ない」と思うが、周りは思っていないと思う。
B：洗濯機一つでも、親がスイッチ入れているところしか見てなくて、実際にやるとなると分からない。家事育児などは誰もが一回やってみるというのが大切だと思う。
S：シングルマザーの女性を描いたドラマ「フェイクマミー」が印象的だった。学校側が変わるまでを描いている。

A：職業に関しては、いろいろ考えてというよりは流れで。中学で職業に関する授業があって、だめだったら変わろうという感じで転職するとか。将来の夢とか、なかなか絞れない。

A：性別役割分担意識については、中学の頃から感じ始めていた。県立なので長髪は禁止。月 1 回の頭髪検査があった。校則は守らないといけないとは思っていたが、先生によって生活指導はまちまちだった。担任の先生は理解してくれていた。髪は耳にかけてぎりぎりまで伸ばしていた。校則では、女子のズボンはいいが、男子のスカートはダメだった。（A は今長髪のため）ヘアドネーションをするので、数日後に髪を切るつもりだ。実習先の養護施設で、男女でしっかり分けて生活していて、男女は一切かかわり合わないというところに研修に行ったとき、小 4 の子が、「なぜ男なのに髪が長いの？」と聞いてきた。職員にはそのような考えはなくても、そのような環境にいたらそのようになる。子どもたちには浸み込んでいる。自分にとってそこに実習に行けたのは良かった。

S：小さいころからの男女平等教育は必要だ。

A：スマホは高校から始めた。それまでは何も考えずに生きていたと思う。ただ否定されたりする環境ではなかった。学外の活動では、ネット上で、セクシャルマイノリティーのテーマで、オープンチャットのコミュニティを作った。それから色々考えるようになったと思う。参加者が 100 人ぐらいになったときに、壊し屋に 1 回だけコミュニティを壊されたので、現在は 60 人ぐらいになっている。ネットだから言いやすいというのがあると思う。必ずしもいい方向に行っているとかは怪しい。流行りだもんね等と軽く考えられたり。意見交換が、ちょうどいいところに収まるという時がない。

（5）社会活動をしている方へ―どんな活動をしていますか？また、関わるきっかけは？

A：高校に入ってからはセクシャルマイノリティーのコミュニティを作って交流している。現在は 60 人ぐらいになっている。ネットだから言いやすいというのがある。

S：サードプレイス（第三の居場所）というテーマが、他の支部での交流で取り上げられていますが。安心できる場所があるということは大切ですよね。

A：自分の作ったネットコミュニティーが、第三の場所になるかも。全国から集まっている。システムを悪用する人もいるかもしれないが、そこと共に成長できているかも。

S：リスク管理というか、頃合いを自分で学んでいける、というのがあるね。

（6）今、大学生活であなたがいちばん問題と感じていることはどんなことですか？

A：特にない。

B：こんなにいっぱいしゃべったことなかった。

（7）行政・企業・大学等に求めることがありますか？

A&B：特にない。

（8）社会とか、大人に対して何か言いたいことはありますか？

A：ネット上のコミュニティーでは高校生から中年まで、年齢関係なく友達に。年齢に関係なく友達でありたい。大人としてこうしなきゃというよりは、互いに学ぶ関係でありたい。時代が変わってきているので、対等に、友達や世代が対等な関係、気軽な関係であるといい。現代は、繋がりが欠けているから気軽に話せる感じだといいなあと思う。

B：というよりも自分一人でいるのが好き。

３．参加した支部会員のコメント

・準備不足にも関わらず当日は楽しく実施

2023 年 5 月～9 月に「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」をテーマとして、学生対象にコロナ禍での生活や思いについてのアンケート及び個別インタビューを実施したが､そのプロジェクトに茨城支部は参加しなかったので､その流れに沿っての雰囲気が醸成できず、さらに担当委員は支部の役員ではなかったので説明の機会もあまりなく、支部のモチベーションを今一つ上げることができず実施への対応が遅れた。しかし当日は皆積極的に参加下さり、大変楽しく交流することができた。ユースの参加の勧誘については、支部会員が尽力下さった。会場も気軽な雰囲気のレストランであったので、ユースのお二人も気軽な雰囲気で参加下さったと思う。

・対照的なユースのお二人

参加のお二人は対照的なキャラクターで、内面重視の B さんは、行動的な A さんからの刺激を受け、良い機会になったと思う。大学卒後に一人暮らしをするように親から進められている、ということが漠然とした不安として B さんの心を占領しているようだった。またいつかこのような機会があれば、微力ながら B さんの不安解消のお役に立ちたいと思った。

・今を生きる強さとは

A さんは、一般的には不幸と決めつけられがちな境遇を人間としてやるべきことをしながら成長されてきて、かつそのことをご自身は誇りに思うという人格が形成されていることに感動を覚えた。ヤングケアラーという言葉がまだなかった頃、黙々と人間としてやるべきことをやってきたという自信が、A さんの清々しい佇まいを作っている。現代の混沌とした、というよりはもう既にガラガラポンが始まっている状況にあって、安易に頼れるものなどないこの社会の誰を恨むとか責任の転化先を見つけることなど思いもしない、自身が切り開いていくだけという強さを持っている。互いに助け合う家族や「芋洗い」的な人間関係の中でこそ、教育や人権意識が育まれていくとの実証者のようだ。

A さんの在りようを勝手に論理的に説明するならば､「今の時代」を説く思想「テクノ・リバタリアニズム」のカテゴリーに入るのかもしれないが、スマホを使い始めたのが高校からであったので、それまでは人間としての努力を積み重ねてきた土台があったからこそ培われた人格であり強さであり、礼儀正しさであると思われた。

・世代など気にしない平等な話しあいを

行政・企業・大学等に求めることがありますか？との問いに対し、ユースからの応えを期待していたこのプロジェクトが、もう既に的外れになってきていると感じさせられた。若者たちは、今の大人たちに、権力者達にも、答えやアドバイスなど期待はしていない。教えて貰うことはもうないらしいと分かってきている。手の付けようがない壊れ方をしている社会、どこから手を付けるの？助けてと言っても助けられないでしょ、変えると言っても変えることなどできないでしょ、と口に出してもしようがないと分かっている。世代など関係なく対等に対話して、一緒に何かを見出していくことこそが、今ユースが最も求めていることだと感じた。

※テクノ・リバタリアニズム（技術的自由至上主義）とは：

現代社会の建前を解体し、テクノロジーと結び付いた個人主義、自由主義的な思想を提示し、個人が「武装」して主体的に生きる道を説く。国家や社会に依存せず、個人の自由と自律を最大化し、テクノロジーで乗り越えようとする。伝統的な共同体との繋がりが希薄になり、「孤立した個人」が増加する中で、その閉塞感や絶望を分析し、新たな生き方を示唆する。「自己責任を肯定せざるを得ない、受け入れざるを得ないという現実を乗り越えて生きるには」への決意のようなもの。社会を変えるのは大変、だから自分だけ生き抜くといった方向。

（AI による説明より）

※ヤングケアラー対策の現在は？：

・子ども・若者育成支援推進法の改正により、「家族の介護その他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められる子ども・若者」として、国・地方公共団体等が各種支援に努めるべき対象にヤングケアラーが明記された。（令和６年６月５日成立、令和６年６月 12 日施行）

・特に市区町村においては、支援を必要とするヤングケアラーを早期に把握し、個別具体的な支援に繋げるために、記名式など個人が把握できる方法による実態調査を定期的（少なくとも年に１回程度）に行うことが重要としている。　（子ども家庭庁 支援局虐待防止対策課 ヤングケアラー支援体制強化事業より）

Ⅱ　静岡支部

１．開催概要

参 加 者：10 名

ユ ー ス：静岡県立大学学部生　5 名

サークル：学生助けたいんじゃー参加者（男性 2 名、女性 1 名）

サークル：リトルワールドキャンプ実行委員会参加者（女性 2 名）

支部会員：5 名　山下いづみ　佐藤成子　大塚佐枝美　鍋倉伸子　勝又幸子

開催日時：2025 年 11 月 22 日 （土） 13 時 ～ 14 時 40 分

開催場所：アイセル 21 静岡市女性会館第 11 会議室

開催の趣旨：

2023 年「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」の調査に静岡支部は協力した。オンライン調査の後おこなわれた個別インタビュー調査にも 3 名の大学生の協力を得て実施した。インタビューのなかで静岡県立大学の学生たちの活動『学生助けたいんじゃー』がキャンパスソーシャルワーカーの学内設置をもとめて運動していることを知った。そしてその活動の意義を評価し、報告書最後に掲載した「提言」の 1 として次の 1 文を入れた。

「教育機関内における相談システムの在り方を見直し、ユースが気軽に相談できる体制を作る」

提言 1 を机上の提言に終わらせることなく、その実現のために私たちができることは何かという問題意識があり、今回のユースとの意見交換の機会をキャンパスソーシャルワーカー設置実現への具体的な行動に繋ぎたいと考えた。

２．意見交換の内容

テーマ「ユースの意見で社会を変えるために」

（1）キャンパスソーシャルワーカー導入実現に向けたこれまでの働きかけと大学の対応について

『学生助けたいんじゃー』の活動は、卒業生有志が一般社団法人を設立し、在学生とともに続けている。キャンパスソーシャルワーカーの設置運動は県内の政策形成プロジェクトに彼らが応募し採択された。2022 年 1 月 14 日には、静岡県庁で報告会が開催された。静岡県議会議員 A 氏が 2 月定例会本会議・一般質問で「大学生の貧困対策・支援体制」について質問し、その中で専任のソーシャルワーカーの配置を強く要望した。当時ローカルマスコミからの取材もありローカル新聞にも紹介されていた。

当初、大学当局にキャンパスソーシャルワーカーの設置を要望したが取り合ってもらえず、直接行政（県）や県知事への陳情を行った。学生への食料支援活動（食べ物カフェ）については、サークルとして学内で活動は許可されているが、ポストコロナで資金不足から宅配による配布は中止、カフェの実施場所についても学食に隣接するスペースが飲食禁止の場所として制限を受けるようになり、活動の広報には不利な場所に移動させられた。サークル創設時の B 指導教員が 2024 年に他大学に転出したこともサークル活動に対する大学の協力体制の弱体化に影響があったと考えられた。

彼らの要望提示に対して大学当局は、キャンパスソーシャルワーカーの導入はできないと回答。『学生助けたいんじゃー』の行っている貧困学生への支援については、サークル活動として継続するようにとの態度に終始している。サークルに対する大学からの資金援助はコロナ禍から比べて削減された。緊急に支援が必要な相談者へは、サークル OB などが個別に対応しているが、社会人の OB の協力は時間的にも制約が大きく限界がある。このような状況で 2022 年以降、キャンパスソーシャルワーカーの設置の働きかけは停滞している。

（2）キャンパスソーシャルワーカー導入を阻むものはなにか？

・大学生の貧困という状況にたいする無理解（大学進学者に経済的問題はないという古い考え、高校卒業生の 8 割が大学・専門学校などの高等教育に進学する時代の変化に理解がない）
・健康支援センターに設置された心理カウンセラーでは解決ができない、構造的問題への無理解
・見えない貧困学生の現実については、学生の間でも共感を得ることができていない現実
・キャンパスソーシャルワーカーの役割・効果などに関する人々の無理解

（3）大学女性協会静岡支部とユースが協力できることはなにか？

・大学生が自らの大学生活の改善に意見を出しているということを貴重なことと考える。何らかの方法で彼らの意見（要望）を政治の場に届ける援助ができないか。
・キャンパスソーシャルワーカーを設置する意義を広く知らせるための講演会を催すなどの広報活動への協力はできないか。
・県の所管部署に対する、要望書の提出。
・一般社団法人『学生助けたいんじゃー』は学生サークルではないが、そこに参加している学生の中には学生ボランティアセンターに所属している者もいる。現在県立大学の学生ボランティアセンター顧問の C 教授は静岡支部と学生サークル、リトルワールドキャンプ実行委員会の顧問として交流があるので、C 教授と意見交換を行うことで、支援の方法を模索することができるのではないか。
・県に対して陳情書を出すタイミング（予算との関係）の検討が必要である。県立大学の県庁担当部局（企画部総合教育課）の理解を促進するためには県会議員など政治家への働きかけも必要ではないか。

3．参加した支部会員のコメント

交流カフェはユース 5 名と支部会員 5 名の同数で実施したが、どうしても支部会員の発言が多くなりがちになり、ユースと意見を積極的に交わすところまではできなかったと思う。今回参加してくれた大学生たちは、学生の貧困問題を考えたり、外国にルーツのある児童の支援を考えたりしているような、社会的問題意識が高い若者たちだった。それでも、年齢差があり社会的経験に差のある支部会員たちの発言に対して即答したり反論したりするようなことができる人はいなかった。真に対話ができるようになるために、もしユースの意見を聴く心構えのようなものがあるならば、まずはその心構えをシニア側も知っておくべきではないかと感じた。

附記

2026 年 2 月 22 日一般社団法人『学生助けたいんじゃー』主催　静岡県立大学学生ボランティアセンター共催で「大学生の貧困を考える会～たべものカフェから見えてきたこと～」という会が開催された。静岡支部からは交流カフェにも参加した会員 3 名が参加したので、以下に報告する。

この会では、県立大学学生ボランティアセンターと学生助けたいんじゃーの活動紹介があり、「たべものカフェ」に対する資金支援のよびかけがあった。また、淑徳大学総合福祉学部の米村美奈教授のお話「必要な学生支援を考える」では、現代の大学生のいきづらさの現実と脆弱な支援体制について知ることができた。米村教授には教壇に上がる前、病院で 14 年間にわたりソーシャルワーカーとして勤務した経験があり、学生支援の必要性を強く認識し、大学が組織的にかかわる意義や必要性を学内で要望し、その相談支援の中心にキャンパスソーシャルワーカーが必要だと強く大学に要望したが、実際の導入までには 5 年を要したということだった。「学内の賛同者を増やす」という活動が重要だったそうだ。

この日は米村教授のお話をはさんで、参加者が少人数のグループに分かれて意見交換をした。グル

ープには１名づつ、学生助けたいんじゃーの現役学生が参加していた。グループワークでは

①必要な学生支援とはなんだと思う？

②困っている学生に対して私たちに何ができるのだろう？

の２つの問いかけについて様々な意見がだされ、学生が用紙にその意見を短く書き出した。

このグループワークという方法は近年学校教育のみならず、ビジネスでも頻繁に用いられる方法で、参加者の意見をみえる化して違いや共通性に気づかせるのに役に立つ。グループディスカッションでは、ともすれば発言者が議論をリードして、言語化が不得手な参加者の意見が出にくいところがあるが、グループワークではすべての参加者の発言が文字化される。グループワークという方法に必ずしも慣れていない、比較的高齢な者たちがこの方法を習得すれば、若い人たちとの意見交換に効果的だと思った。

Ⅲ　京都支部

１．開催概要

参 加 者： 4名
ユ ー ス： 大学院生１名
支部会員： 3名　島田洋子　高橋侑子　松田栄子
開催日時： 2025年 11 月 15 日 （土） 14 時 ～ 16 時
開催場所： ホテル日航プリンセス京都

２．意見交換の内容

まずは現在の状況を聴く事から始まった。京都大学理学部動物行動学博士課程３回生で、博士論文を作成中である。そのため週１回の研究会の外は自由に研究をし、今は特に京大に属する調査地においてミソサザイの調査活動をしている。部活動、サークル活動はしていない。

修士課程の学生だったころは、奨学金と塾のバイトをして生活をまかなってが、今は博士課程用の支援があるのでバイトはしていない。それは研究計画を提出し、審査を受けて通ったらもらえる。また大学費用は､条件があって認められれば半額になる｡学会などへ行く費用は研究費から支給される。

社会活動としては、研究がミソサザイという鳥類であることなどから、環境省や、山階鳥類研究所で秋にどんな鳥が来るか調査するボランティアをしたという。

京大の博士課程ということで恵まれた状況ではあるが、この研究分野がある大学は少なく、就職は厳しい。この分野はヨーロッパとくにイギリスにおいて盛んで、そこで研究できる機会があればよいと考えている。

シニア会員からは、結婚後に夫と共に海外で生活し学びを深めた経験が語られ、海外での経験が視野を広げる上で大きな意味を持つことが改めて共有された。

３．参加した支部会員のコメント

このような世代の異なる参加者同士が親しく話す場を持つことで、それぞれの視点から現状をとらえ、何らかのサポートができる機会が生まれると思った。

また、優秀な若い研究者が早い段階で適切な海外の研究環境に触れる機会を得られるような仕組みが望ましいと思う。

今回参加してくれた大学院生は「次世代につなぐ会」の京都会場に参加していた何人かに声を掛けた内、ただひとり応じてくださった人である。京都は奨学生、奨学生応募者が多いので、その一部に頼んでみたが忙しそうで難しかった。奨学生関係のユースや身近の知り合いのユースにも様々な方法で関係を育てていくようにすれば、今後、交流会などの人集めに一つの有効な手段となると思う。

Ⅳ　奈良支部

１．開催概要

参 加 者：

ユ ー ス：A さん：26 歳男性（会社員）　B さん：26 歳男性（自営業）

C さん：20 歳女性（私大薬学部 2 年生）

支部会員：河合摩香　中道貞子

開催日時：2025 年 11 月 21 日 （金） 18 時 ～ 20 時 20 分

開催場所：ユース参加者経営の飲食店（奈良市）

２．意見交換の内容

（1） 今の生活はどんな状況ですか？

A：高校卒業後に就職し、正社員として働いている（社会人 7 年目）。一人暮らしで充実した毎日を送っている。全員正社員で 40 名くらい（男性約 60%、女性約 40%）。転職する人も多いが、本人にとっては人間関係はよい。役職を持っている女性は少ないが、女性が役職についてから残業が減り、飲み会の誘いを断りやすくなった。今は、転職しようとすると、結構仕事はある時代だと思う。退職届代行は自分が働く会社でもあった。

B：学生時代飲食店でいろいろアルバイトをし、自分の仕事としてあっていると思った。3 年前に、2 人の姉と一緒に飲食店を始めた。自分が料理を担当しており、メニューも色々変えたりしている。大変だが楽しい。

C：私立大学の薬学部に自宅（6 人家族）から通う大学 2 年生。楽しく大学生活を送っている。周りの人から「薬剤師なら働き方が比較的自由に選べる」というアドバイスを受けて薬剤師を目指した。資格があれば仕事を続けることができる。ライフスタイルに合わせて仕事ができるというのが志望校を選んだ動機である。

（2） 将来について考えていることは？

A：将来は家庭を持ちたいと考えている。マッチングアプリもやってみたことはあるが、怖いという気もした。資産運用もしている。

B：今を楽しんでおり、先のことは考えていない。

C：国家試験に合格して資格を得る。資格を生かした仕事をしたい。

（3）今の時代や社会人になって思うこととは？

B：景気は良くなっている感じはない。

A：物価高を感じる。（シニアが経験したような）良い時代を経験していないが、そんな時代を知らないだけましかもしれない。

A：社会人になって変わった。「人慣れ」した感じがする。営業で人と話す機会が多いせいかもしれない。ストレスを感じることはあるが、長引かない。日常的に腹が立つことがあっても、怒っている自分がもったいないと思う。

（4）行政・政治・大学等に求めることは？

C：大学 2 年生になって、一クラス 100 人余りでの授業を受けている。大学は至れり尽くせりの感がある。3～4 人に一人の担任が付き、何かと面倒を見てくれる。担任と一緒に出掛ける学生もいる。テスト対応など大学のサポートもある。

自宅から通学している学生が多い。母子家庭の子で大学の近くに母親と一緒に住んでいる学生も

いる。2 年生になるまでに 20 人くらいはやめた。

B : 奈良市には、30 代の女性の起業を援助する制度がある。その話を聞いて姉が応募し、助かっている。奈良市は、外観を汚さないようにという規制が強く、古い（希望する看板などが出せない）。

A : 出逢いに困っている人が結婚したくなるような支援があればよい。職場の子供がいる人はきついという。そういう人対象の有給休暇が充実すればよい。自分の会社では、残業も前もって知らされるのでよい。

C : これからの日本がかかっているので、選挙の投票率が低いことが気になる。投票に行かない人は、立候補者のことを調べてもよくわからないという。もっと分かる方法があればよいと思う。

（5）今の若い人にアドバイスしたいこと、大事にしたらよいことは？

A : 小さいことからでよいので、できることを進んでやる能力をつけるとよい。年齢には関係ない。仕事の内容ではなく、人間関係に悩んでいたら違う道に行ったらよい。人と関わらない仕事もあるので、自分に適した仕事を選ぶ方がよい。

C : 後輩へのアドバイスとしては、行けるところではなく行きたいところへ。とりあえず進学、就職するという人も多い。やりがいがないからやめるのではないか？

（6）シニアについてどんな印象があるか？

A :「若い人は〇〇だ」という固定したイメージをもっているように思う。それは違うんだということを分かってほしい。

３．参加した支部会員のコメント

奈良支部の交流カフェの広報については、8 月初旬に開催された大学生主体のイベントで、5 大学の学生約 30 人にチラシを配付し、応募を呼び掛けた。フォーラムに積極的に参加している学生たちなので、参加を期待したが、応募者はなかった。

次に、元小学校教員の会員から、卒業生に参加を呼び掛けた。快く「参加する」と応じてくれた学生は何人かいたが､友人を誘っても応じてもらえないケースが多かった｡交流カフェの趣旨を理解し、参加してもらうことはとても困難なことに思えた。また、実験などで忙しく、なかなか日程が合わなかったり、休日はバイトがあったりして、学生たちも忙しいことが分かった。

交流会を終えての感想は、シニアとの交流に応じてもよいと思う時点で、社交性があり、今の生活が充実しているユースが集まった様に思う。今回は 2 人の男性社会人という、大学女性協会会員が接する機会の少ないユースの意見を聞くことができた点は良かった。

限られた時間、ごく少数での交流であり、「ユースの声を聴き、考えを知る」という視点からは不十分だったが、これからも色々なユースと交流する中で、「若い人は〇〇」という固定観念にとらわれない態度を持ち、シニアにできること検討していく姿勢を持ち続けたい。

V　岡山支部

１．開催概要

参 加 者：9 名
ユ ー ス：3 名　A さん　B さん　C さん
支部会員：6 名 片岡雅子　木口京子　小林知子　塩田澄子　竹井恵子　谷川紀子
開催日時：2025 年 11 月 24 日 （月） 14 時 ～ 16 時
開催場所：岡山市「さんかく岡山」　岡山市男女共同参画推進センター
ユースの紹介：

A：男女共同参画推進センター勤務　包括的性教育の推進に取り組んでいる。ユースクリニックとの連携や大学・高校からの依頼によるアンコンシャス・バイアスなど人権・ジェンダーに関する出前講座を実施。2024 年には国連本部で開催された第 68 回女性の地位委員会（CSW）にユース派遣として参加。

B：2025 年 3 月に大学院社会文化学研究科博士課程を修了し、現在も客員研究員として所属。研究テーマは主に介護分野。リハビリテーション学院において 4 年前から講師を務め、理学療法士の養成に携わっている。理学療法士として実務にも従事。

C：高等学校で英語科教員として勤務。大学時代には、模擬国連世界大会への参加やユネスコ活動に継続的に携わった。

２．意見交換の内容

（1）サードプレイスの重要性について

発達障害のある子どもや親、悩みを抱えたユースにとって、安心して自己表現や相談ができる「サードプレイス」の重要性を共有した。しかし、岡山ではそのような場が十分に整備されておらず、支援が教員個人に集中していること、若者が社会問題について話しにくい雰囲気があることが課題として指摘された。

（2）日本のユースクリニックの現状と課題

ユースクリニックは、若者の性や健康、心に関する相談の場としての役割が共有された。しかし、日本のユースクリニックでは医療行為が行えない制度的制約が大きく、必要な医療支援につなげにくいことが課題として指摘された。また、周知不足により利用者が少なく、予約制が利用の心理的ハードルをさらに高めている点も問題とされた。商業施設での出張相談などの試みも報告されたが、費用やプライバシー確保の課題により実施が難しいこと、相談者が来ない場合の人的資源の非効率も指摘された。総じて、認知度向上・アクセス改善・医療連携の強化が日本のユースクリニックに求められることが整理された。

（3）相談の心理的ハードルをどう下げるかについて

勤務していた高校では相談体制が整備されていたものの、保護者へ情報が伝わる不安から生徒が利用しにくい現状があった。そのため、学校外に安心して相談できる場づくりが求められていた。大学祭での出張ユースクリニックでは、誰でも気軽に立ち寄れる開放的な雰囲気が相談のきっかけとなり、心理的ハードルを大きく下げることが確認された。さらに、地域住民や

シニア世代が関わる「斜めの関係」の有効性も示された。子ども食堂などの地域イベントに出張する形態は、若者だけでなく保護者への支援にもつながり、相談機能の周知やアクセス向上に有効であることが指摘された。常設拠点には財源や人材の課題もあったが、地域活動との連携により支援の機会を広げられる可能性も整理された。

（4）日本の性教育のあり方について

日本では幼児期からの性教育や子どもの権利教育が十分に整備されておらず、欧州との格差が指摘された。学校における性教育は依然として不十分で、子どもが正しい知識にアクセスしにくい現状がある。授業で「セックス」といった基本用語さえ使用できない場面や、教員が具体的な質問に答えられないことで、子どもがインターネット上の不適切な情報に頼る危険性も指摘された。また、外部講師の資料から教育委員会が重要語句を削除するなど、制度上の制約が性教育の質を下げている事例も報告された。一方で、女子校など一部の学校ではジェンダー教育が日常的に行われている例もあるが、学校間で取り組みに差があることも課題として挙げられた。

（5）トランスジェンダー当事者のトイレ利用の課題について

トランスジェンダー当事者が公共トイレを利用する際に抱える不安や社会的障壁が共有された。外見と性自認が一致しない場合、周囲の利用者との間に誤解や戸惑いが生じやすく、当事者は利用をためらう場面が多い。調査では、約 2～3 割がトイレの利用困難を理由に外出行動を制限していることが示され、特に女子トイレに入りづらい MtF（Male to Female）当事者の負担が大きいことが明らかとなった。また、学校や職場など人間関係が固定された環境では利用がさらに難しく、匿名性のある商業施設やコンビニが比較的使いやすいとされる。一方で、トランスジェンダーに関する議題は公的機関では議論自体が進みにくい現状があり、社会的理解の不足が課題として浮き彫りになった。

（6）理想の社会に向けた取り組みと課題

若者が相談にアクセスしやすい環境づくりの重要性と課題が共有された。ユースクリニックや男女共同参画推進センターの事例から、相談員の可視化や自習スペースの活用が心理的ハードル低減に有効であることが示された。一方で、相談対応人材の確保や自習利用から事業参加への導線整備は課題である。また、公民館や個人塾、デイサービスなど既存の場を活用した相談スペース設置や、ハンドマッサージ等を通じた親近感の醸成が提案された。ユースカフェ運営に関しては、大学女性協会の有志による主体運営が望ましいとの意見があり、具体的な場所候補も挙げられた。総じて、相談にアクセスしやすい環境づくりと、運営体制の確立が、理想の社会に向けた重要な取り組みとして整理された。

（7）教育現場における働き方改革について

教育現場における課題と支援の在り方が共有された。地方では部活動の指導者不足や地域移行に伴う保護者の負担増が課題となっていた。また、教員の働き方改革は十分に機能せず、授業や探究活動の増加により長時間労働や土日勤務が常態化しており、特に熱心な教員ほど負担

が大きいことが指摘された。こうした教員や親への過重負担は、子どもにも悪影響を及ぼす可能性が示された。そのため、子どもの支援は家族や教員に依存するだけでなく、安心して過ごせる場所や第三者による継続的な支援（サードプレイス）の重要性が改めて認識された。また、支援は個人ではなくチームで行う体制づくりが求められた。しかし、行政からの支援や人手・予算は十分でなく、現場と上層部との認識の乖離も依然として課題として残されていた。

３．参加したユースの感想

A:塾で教える中で、子どもたちがコンテキストを読み取る力を十分に持たなくなっていると感じている。特に YouTube などの映像中心の情報は、全ての情報を自分で考えなくても入ってくるため、文字を通じてキャラクターの気持ちや状況を想像する力を養う余白が失われやすい。漫画や文章を読む経験は、そうした想像力を育む上で重要だったと感じている。また、出前講座で幅広い世代と関わる中で、社会問題は複雑に絡み合っており、インターセクショナリティのように、複数の視点から交差的に捉える必要があることを改めて実感した。今回のサードプレイス的なプロジェクトも、教育やケア、子育て、ジェンダーといったさまざまな問題と関わっている。

　私は、以前から岡山にこうした場所が欲しいと感じており、今回大学女性協会の活動に関わる機会をいただき、ぜひ実現したいと考えている。また、全国ネットワークや国際的な会議とのつながりを通して、日本国内だけでなく世界の事例や視点も取り入れながら、地域で必要とされる支援や取り組みを考えていく重要性を改めて感じた。今日の議論を通して、多角的な視点で問題を捉え、アイデアを生み出す楽しさと意義を実感できる時間となった。

B:全校生徒 8 人の小さな島で、同年代の女子は自分一人という環境で育った。高校進学に反対されるような環境でも、男子と対等に扱われなくても、それが「普通」として受け入れてきた。今回参加して、女性として男性と平等に意見し行動する必要性や、自分の仕事である理学療法士の職場など男性優位の社会構造を変えていく重要性を更に考える機会になった。自分も行動していきたいと思う。

C:これまで女子だけの環境で過ごしてきたため、比較されることなく恵まれた環境で生きてきたのだと改めて感じた。また、教育に関わる中で、精神的な問題を抱える生徒や家庭環境、LGBTQ など、さまざまな社会的背景が複雑に絡み合っていることを実感した。一つの視点だけでは物事を理解することはできず、多角的に考える力を育むことが重要だと感じた。今後はこうした多角的な見方を生徒に伝えていきたいと思う。

４．参加した支部会員のコメント

＊大学女性協会のイベントに初めて参加し、普段感じている疑問や不合理さを共有できたことがとても有意義だった。これからは若い世代に恥じないよう、自分なりの方法でジェンダー平等や多様性のある社会づくりに関わっていきたいと強く思った。

＊参加してくださったユースの皆さんが、それぞれの関わる職域から見えてくる課題を挙げ、論点としたことで、多面的な観点から議論を深めることができたのは大変有意義だった。改めて、日常の中には目に見えにくい多くの問題が存在していることを、今回の交流会を通して認識することができた。このような機会を持つことで、問題意識を共有するユース同士がつながり、

それぞれが抱えている課題が「点」から「線」へと結びついていく実感も得られたのではないか。私たちシニア世代にとっても、自分たちに何ができるのかを改めて考える貴重な機会となった。

＊シニアとユース、そして異なる職業の女性たちが集まり、ジェンダーをはじめ、社会にあるさまざまな問題点について多角的な視点から意見を交わすことができた。世代や立場の違いがあるからこそ、日常では気づきにくい課題が浮かび上がり、互いに新たな気づきや刺激を得る場となった。お茶とお菓子を囲んだアットホームな雰囲気の中で、参加者は思いを語りやすく、安心して意見を共有できた。話題は尽きることなく、時間があっという間に過ぎていき、このようにユースとシニアが気軽に語り合える場の必要性を感じた。

＊高い問題意識を持ち活動されているユースとの交流会は貴重なものだった。それぞれの立場からの情報提供、問題提起を共有し、議論することは意義あるもので多くの刺激をいただいた。また普段あまり意識していなかった社会の課題に気づくことができ、シニアとしても何ができるかを模索し、実行していくことの大切さを認識した。

＊　まず第一に思ったことは「ユースとつながることの難しさ」である。広報用のチラシを作成して配布したものの、グーグルフォームを通しての申し込みは一つもなかった。その原因として考えられるのは、知らないシニアからの呼びかけに気軽にこたえようとするユースはいないということだろうか。また、ユースも何かと忙しいことも感じた。

結局、5 支部で交流カフェを実施し、そこに参加してくれたユースは合計 14 名、シニアは合計 22 名であった。ユースは学生から社会人まで多様であり、いろいろな背景を持つ人たちの話を聴くことができた点は良かったと思う。「キャンパスソーシャルワーカー」「サードプレイス」などの視点もあり、また、解決すべき課題もいくつか共有できた。今後も継続して関心を持ち続け、解決に向けて何ができるかを考えていきたい。

こうしたイベントに参加してくれるユースは、概ね、自分自身は充実した生活をしている人が多かったようだ。また、問題意識をもって、積極的に社会的な課題解決をしようというユースがいることを知ることができた。ユースとシニアが協働することで、一方ではできない課題解決の糸口が見つかることを期待したい。（TN）

＊　今回、ユースとシニアの交流の機会を持てた支部は、結局以前からユースとつながりのある場合と目的が明確だった場合に限られたようだ。私が関わった交流カフェも今までの人脈を辿った結果、快く応じてくれて、さらにユースからサードプレイス（第 3 の居場所）をテーマに意見交換をしたいと提案してくれたことは大変喜ばしいことだった。ユースはそれぞれ友人や知り合いに声をかけてくれたものの新しいつながりは生まれなかった。しかし、さまざまな立場の参加者が複眼的な視点で社会課題を共有し、智恵を出し合い、具体的な実践のヒントも得ることができた有意義な機会となった。話し合いを通じて、共に生きやすく希望ある社会を作っていきたいというエネルギーが共鳴しているような感覚を味わうことができた。今後、彼らとどのように関わっていくのかを模索するために、継続して交流カフェを実施したいと考えている。その場がサードプレイスになることも期待しながら。（MK）

＊　参加した支部や交流したユースは少なかったようだが、夫々ユニークな参加者が多く、現代のユースの考え方の一端を知ることができて勉強になった。在学中の人でも学ぶテーマがはっきりしていて、卒業後の仕事もしっかり考えていることを心強く思った。すでに社会に出ているユースは、それぞれの立場で自己を確立しており、また社会的活動に参加している人も多く、今の若者は積極的で頼もしいと思えた。

静岡支部の報告で、大学の卒業生有志が、在学生と共に続けている「キャンパスソーシャルワーカーの学内設置運動」は多くの賛同者を得て、大きな活動となって行ったのに、サークル創設者のリーダーが居なくなって、弱体化したとも考えられる、との記事を読んで残念に思った。

どのような小さな活動でも、リーダーの存在は大きいと、かねがね思っている。これからは、AI（人工知能）の時代と言われていて、毎日、話題となっているが、私たちが集まって考えるより、AI に答えさせる方が正確で早いのだろうか。激動する世界、天災、人災が何時起きるか不安の時代、立ち止まって深く考える時と場所を、見つけたいといつも願っている。世代を超えた交流の場を作りあげるという希望を、若い人たちと共有できるように、これからも、いろいろな活動を見守っていきたい。（FF）

＊　静岡支部では、2010 年度～2011 年度にかけて「多文化共生活動助成・研究奨励事業」を実施いた。その時に、県内で活動する様々な団体との交流がはじまった。静岡県立大学の学生サークルとの関係もそのころから継続してきた。2022 年度公開シンポジウムで当時県立大学で教えておられた津富宏教授に基調講演「ケアしあう社会をつくる」をしていただき、パネルディス

カッションでは、今回のシニア＆ユースカフェにもご協力いただいた学生サークルの学生にも発言してもらった。ほそぼそではあるが、地域のユースとの交流の機会を継続してこられたことで、今回も 5 名のユースから協力を得ることができた。支部会員に呼びかけたところ 5 名の参加者が得られ、ユースとの意見交流の貴重な機会となった。今回参加した他支部の感想を読むと、ユースとの繋がりを得ることがたやすいことではないことも事実だ。静岡支部のユースとの関係性が恵まれたものであることをあらため認識すると同時に、その関係性をいかに社会を変える原動力としていくのか、実践を通じて取り組むべき価値のある活動だと強く感じている。（YK）

＊　語り合いの場　設定ご苦労様でした。（AK）

＊　今回の交流カフェでは、動物行動学を研究する博士課程の学生と対面で話を聞きながら、支部会員の仲間とともに交流することができ、とても印象深く、楽しい時間となった。
　また、各支部の報告から、ユースがそれぞれの場で多様に活動している様子を知ることができ、大変興味深く感じた。
　キャンパスソーシャルワーカー、ユースクリニック、子ども食堂など、さまざまなサードプレイスの必要性が挙げられているが、今回の交流カフェのように、対面で温かく心の通い合う場は、サードプレイスの原点とも言えるものではないかと思う。
　この交流カフェをきっかけに、大学女性協会の国連派遣への応募を勧めたところ関心を持ってくれ、今回は予定が合わず応募には至らなかったものの、次回に向けて前向きな関心が生まれた。こうしたつながりが広がっていくことも、交流カフェの大きな意義の一つではないかと感じた。
　現在では、茨城支部のようにオンライン上で交流の場をつくっている例もあり、サードプレイスの形は多様である。しかし大学女性協会においては、安心して信頼できる交流カフェというサードプレイスを築いていくことができるのではないかと感じた。（EM）

＊　昨年度までの委員会活動、具体的にはユースとのインタビューで、実際にユースはこの社会に大きな問題を感じていることを知ることが出来ました。その活動を発展的に継続する目的で、さらにユースの声を聴き、シニアの自分たちがケアし合う社会の一員となるための実践演習の好機となる期待を持って、声掛けをしようと試みましたが、場をつくることが出来ずに残念でした。自分自身の力（＝時間）不足が第一の原因でしたが、実現できた 5 つの支部の報告から、このような企画を成立させるためには次のようなことが必要であると思いました。一つは、支部として活動の積み上げと継続の中で、何らかの課題の共有ができている。次に、少なくとも複数の支部会員が協力できる態勢が築けている。そして、具体的な提言が発せられるまでの実践を積むためには、今回の失敗を生かして継続する他に方法は無いということを、強く感じることができました。格差社会と言われて既に四半世紀、この大きな社会構造を変えるのに自分たち一人一人に何ができるか、悩んでいても答えは出てこないのであれば、少しでも良いと思うことを実行することしか無いと思います。
　昨年３月発行の報告書の４つの提言は、具体的で明確、社会を動かす可能性は高いと評価されます。ただ、実際に活動できなかった自分としては、これらの提言を身をもって納得できるまでの活動を次年度に後付けでもよいので行っていくための指針としたいと思います。（CS）

＊　学生さんが、それぞれの地域や個人の生活から出てくる個別の課題に取り組んでいることがよくわかりました。それと同時に、私たちが解決しなければならない、共通した問題もいくつかあぶりだされたと思います。
　参加したユースや支部会員の間で率直な話ができたことで、双方に有意義な時間だったと思いますし、そこから静岡支部のように、一つの目的達成のために、学生と JAUW が協力して行動を起こすきっかけが生じたことは大きな成果だと思います。ただ、その一方で、今回参加し

たユースがそう多くなかったことを考えると、ユースと JAUW の協調という機会を一般にどう知ってもらうか、ということが JAUW にとって大きな課題だと思いました。（NK）

＊　今回実施された「ユース×シニア交流カフェ」は、ユースとシニアが世代を越えて意見を交わす場として、互いの価値観や経験を知り、理解を深める貴重な機会であったと感じた。一方で、参加していただけるユースを募ることの難しさも実感する機会となった。

参加したユースは社会人としてそれぞれの分野で活動しており、自らが取り組んでいる事柄や直面している課題について、強い熱意をもって語っていた。日常生活の中で自身の思いや問題意識を表明する機会は少なく、このような対話の場を求めていることが伝わってきた。また、交流カフェ終了後も参加者同士が集まり、連絡先（LINE 等）を交換するなど、名残惜しそうに交流を続けている様子が見られた。自ら行動を起こし、社会的な課題に積極的に取り組もうとするユース同士をつなぐ場を提供できたことは、本交流カフェの大きな成果であったと考えられる。

今回「ユース×シニア交流カフェ」を通して、報告書の提言にもあるように、ユースが屈託なく声を上げることのできる場や機会を、今後さらに増やしていくことの重要性を感じた。（SS）

＊　ユースたちが自分なりに「生きづらさ」に向き合って対処していることに驚いた。と同時に「生きづらさ」の渦中にいる人はカフェに出る暇もないのかもと。

交流カフェでの話し合いを JAUW としてどのように扱うのか？京都支部のように優秀な院生の「推し活」になるのか「third place」提供の場になるのか、いずれも意義はあると思う。静岡支部のように活動の道が通じそうなところは協力の方法も考えられると思うが、奨学金問題などになれば為政者との接触（？）も考えられ JAUW として窓口の必要？

JAUW の次の命題「ウエルビーング」にお互いの人格を尊重しあいながらシニアとユースが共存するコミュニティ建設にも「交流カフェ」は有効に機能すると思われる。（KH）

交流カフェを終えて

調査・研究委員会　中道貞子

「はじめに」で言及しているように、「ユース×シニア交流カフェ」は、世代を超えた対話の機会を増やし、「ケアしあう社会づくり」をさらに進めることを目的として取り組みました。

5 支部の協力を得て実施し、ユースからは 14 名、シニアからは 22 名が参加しました。ユースの参加人数は少なかったのですが、大学生 8 名、大学院生 1 名、社会人 5 名と、多様な背景をもつユースの参加があり、貧困、教育、ジェンダー、働き方、ケア、居場所づくりなど、現代社会が抱える複雑な問題への言及がありました。

シニア世代にとっても、ユースの語りは新たな気づきと学びをもたらしました。固定観念に気づき、耳を傾ける姿勢を問い直し、共に考える関係へと歩み寄ることの大切さを実感する時間となりました。

今回の取り組みは、2025 年 3 月発行の JAUW 調査・研究委員会報告「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」の最後に挙げた提言（p.1 参照）の具現化を目指すものでした。その提言に沿って、交流カフェの中で言及された内容を、改めて考察してみたいと思います。

1.　教育機関内における相談システムの在り方を見直し、ユースが気軽に相談できる体制を作る

大学における「キャンパスソーシャルワーカー設置の提案」がありました。実現することには高いハードルがありますが、その必要性に鑑み、継続しての要請と、周りの理解や支援の動きが継続することを願っています。

また、高校や大学等の校内だけでなく、学校外でも安心して相談できる場づくりが望まれます。大学祭での「出張ユースクリニック」の紹介は、利用が敬遠されがちな「ユースクリニック」がより利用しやすいものになるヒントになりました。

2.　授業料無償化の政策や奨学金制度における給付制への移行を加速し、経済的背景に関係なく、誰もが教育を受けることができる仕組みづくりを進める

奨学金制度が有効利用できている例の紹介がある一方、困窮する学生の実情が見えづらいことも多いと思われます。2026 年度からは公・私立ともに高校教育の無償化が実施されようとしており、文部科学省は「高等教育の就学支援新制度(*)」を打ち出してはいますが、これからも誰もが安心して学べる仕組みづくりが進んでいくことを願っています。

(*)https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/hutankeigen/

3.　自立した個人を形成する市民教育、特に考えや意見を政策の場につなげる姿勢を培う主権者教育の徹底を図る

高校で選挙について学んだり、大学で期日前投票について説明があったりしたことで、選挙に関心を持つことができたという発言があり、主権者教育の重要性を認識する一助となりました。その一方、性教育が不十分であったり、セクシャルマイノリティに対するアンコンシャスバイア

スを感じる発言もありました。公平で公正な社会になるための市民教育や主権者教育の在り方をさらに検討する必要があると思います。

4.　ユースが社会へ繋がっていくことのできるきっかけ作りとして、世代を超えた対話の機会や場の設定を多くし、「ケアしあう社会づくり」を進める

「サードプレイス」の重要性に言及する場面が多くありました。ユースからは「こんなに話したのは初めて」との発言があったり、家庭の事情を事細かに説明がなされたりする場面もありました。参加者はみな、年齢、生育歴、教育歴、職業などの違う人との対話から多くの気づきを得ることができたことと思います。仕事や立場の違う集団、利害関係を伴わない多様な人と交流できる交流カフェのような取り組みが、サードプレイスの一つになる可能性を感じました。

グループディスカッションではなく、グループワークという手法が意見交換に効果的ではないかという意見もあり、単に対話の場をつくるだけでなく、進行にも工夫が必要と思われます。

また、地域活動に触れた報告がありましたが、そうした活動の中からも、対話の機会が生まれると考えます。その他、ネットコミュニティの紹介もあり、人々とのつながりを形成するための様々な可能性を感じます。

今回の取り組みを通して明らかになったのは、ユースが「答え」や「指導」を求めているのではなく、＜対等な関係の中で、自分の声を安心して発することのできる場＞を求めているということだと思いました。そして、その場を共につくることこそが、私たち大人世代に求められている役割であると考えます。

報告書の提言に掲げた「ケアしあう社会づくり」は、制度や政策だけでは実現しません。日常の小さな対話、世代を超えたまなざし、そして互いの違いを尊重しながら共に考える姿勢の積み重ねによって初めて形になるものでしょう。本年度の交流カフェは、その第一歩を確かに踏み出したといえます。

今後も、ユースが安心して声を上げられる場を広げ、シニア世代がともに学び、支え合う関係を育てていくことが求められます。今回の経験を土台として、私たちは引き続き、地域の中に多様な「サードプレイス」を生み出し、ユースとシニアが協働して未来をつくる取り組みを進めていきたいと思います。

本報告書が、次の一歩を踏み出すための確かな道標となることを願っています。

（「交流カフェを終えて」の一部に、AI（copilot）による要約を引用しました）

調査・研究委員会

笠間　昭子	片岡　雅子	勝又　幸子	木口　京子	窪田　憲子
塩田　澄子	志垣　瞳	城倉　純子	鈴木千鶴子	谷川　紀子
中道　貞子	端本　和子	橋本　慶子	林　恭子	日向美砂子
福田　文子	松田　栄子	山下いづみ	渡部由紀子	

（2025年度　登録委員　50音順）

ユースの声から見えた課題～世代をこえて希望の対話を

ユース×シニア　交流カフェ

発　　行　2026年3月
発 行 者　一般社団法人　大学女性協会
〒160-0017
東京都新宿区左門町11-6　パトリシア信濃町テラス101
TEL：03-3358-2882　　URL：https://www.jauw.org